



現代韓国語の鳴音後濃音化について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 車, 美愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006229

現代韓国語の鳴音後濃音化について

車 美 愛

1. 鳴音後濃音化

現代韓国語においてある種の漢字要素（字音素）が後続要素となって語を形成するとき、次の例のようにその字音素の初声の平音が濃音化する場合があることはよく知られている（アポストロフィ（'）はその後の要素が濃音化することを示す）。

- | | |
|----------------|------------|
| (1) 價：生産'價、物'價 | cf. 價格、價值 |
| 權：選舉'權、實'權 | cf. 權力、權利 |
| 科：國文'科、齒'科 | cf. 科目、科學 |
| 宅：查頓'宅 | cf. 宅内、宅下人 |
| 法：國際'法、憲'法 | cf. 法律、法人 |
| 病：傳染'病、胃'病 | cf. 病院、病狀 |
| 性：可能'性、向'性 | cf. 性質、性格 |
| 罪：放火'罪、斬'罪 | cf. 罪人、罪惡 |

この種の濃音化の生じる環境はすべての鳴音の後である。すなわち、母音の後（選舉'權、齒'科）、／ㄴ／の後（生産'價、憲'法）、／ㄷ／の後（物'價、實'權）、／ㄹ／の後（傳染'病、斬'罪）、／ㅇ／の後（可能'性、向'性）に生じている。したがって、この濃音化を便宜的に「鳴音後濃音化」と呼ぶことにする。また、濃音化する平音の種類にも制限がない。／ㄱ／（價、權、科）、／ㄷ／（宅）、／ㄱ／（病）、／ㄴ／（性）、／ㄴ／（罪）、とすべての平音にわたっている。

平音で始まる字音素のすべてが鳴音の後で濃音化を生じるというのであれば記述上なんの問題もない。しかしながら、鳴音後濃音化は例外が非常に多く一般性のかなり低い音韻過程である。環境に合っても濃音化しない場合の方がむしろ多いくらいである。まず、鳴音後濃音化は辞書的に限定された過程である。つまり、冒頭で述べたようにこれは「ある種の字音素」に限って生じる過程であり、濃音化を生じる字音素と生じない字音素とに区別されるのであるが、そのうち濃音化を生じる「ある種の字音素」を音韻的・形態的・意味的に特徴付けることができないのである。例えば、「價」と同じ音形を持つけれども「歌、家、街」などの字音素は次のように決して濃音化しない。

- | |
|------------------------|
| (2) 歌：流行歌、愛唱歌、校歌、讚歌、唱歌 |
| 家：演奏家、愛妻家、大家、民家、人家 |

街：繁華街、貧民街、商街、市街、死街

形態論あるいは意味関係の観点から(1)と(2)の例を比較してみても、有意的な違いがあるように思われない。また、(1)の「價、病、性、罪」に対してそれぞれ意味的に類似した「費、傷、質、犯」などの字音素は決して濃音化することがない。

- (3) 費：交通費、食事費、接待費、経費、會費
傷：貫通傷、擦過傷、致命傷、重傷、火傷
質：神経質、有機質、脂肪質、變質、異質
犯：強盜犯、政治犯、知能犯、共犯、主犯

したがって、(1)のような字音素は濃音化する性質を持つ字音素として辞書的に規定されるべきものである。このような字音素を以下「濃音化字音素」と呼ぶことにしよう。濃音化字音素は後接字音素の極く一部でしかない。

さらに、濃音化字音素と見なされる字音素であっても、常に濃音化が生じるわけではない。後に述べるように鳴音後濃音化は語の構成と密接な関係がある。独立要素と結合するかそうでないかによって濃音化の分布が異なる。また、漢字で表記すれば同じ要素であっても、意味の違いにより濃音化したりしなかったりする。さらに、語構成や意味上の条件を満たしている濃音化字音素であったも濃音化しないという完全に例外的な場合もかなりあるし、同じ語においても方言差や個人差によって濃音化したりしなかったりするいわゆる「ゆれ」の現象も少なくない。

鳴音後濃音化に関する従来の記述は、極めて不十分であったと言わなければならない。鳴音後濃音化が上に述べたような性質を持つために、この過程は例外が多く一般性の低い過程であると初めから決めつけてしまっているようである。鳴音後濃音化の分布の背後にあるかもしれない規則性あるいは一般的傾向を探ろうという試みがほとんどなされていない。記述と言えば、濃音化する例をいくつか挙げ、その場合に限って「規則」を定式化し、補足的に例外、つまり濃音化しない例を二、三挙げるという形で処理しているのが普通である。確かに、目的によってはこの程度の記述で十分な場合もあるけれども、鳴音後濃音化の全体的記述からほど遠いものであることは言うまでもない。生成音韻論の枠組みを用いた記述でも、濃音化する場合の記述を形式的に厳密化することに関心が集中しており、全体的記述の充実という観点から見ればほとんど進展はないと言ってもよいだろう。これはひとえに安易な決めつけが先行して鳴音後濃音化の実態を綿密に調査しようとしなかったことに起因すると思われる。

稿者はすでに車(1988)において各種の韓国語辞典の濃音化に関する表記を資料として調査することによって、25個の濃音化字音素を抽出し、それを濃音化の分布の状況に応じて三つの類に分類して、各々の濃音化字音素について多少なりとも詳細に論じた。本稿は基本的にはそれと同主旨のものである。しかしながら、車(1988)が調査対象とした辞典は主としていわゆる中辞典クラスのものであったため、得られたデータは量的にも質的にも十分であるとは言えず、また、その際の分析・記述にも誤りあるいは不備な面が多くあることが後でわかった。そのた

め、改めて大事典クラスの辞典を対象として調査をやり直し、それによって新たに得られた約六千件に上るデータに基づいて鳴音後濃音化の実態を再検討した。本稿はその調査分析結果の報告である。

今回の調査に用いた辞典は次の三点である。

『國語大辭典』李熙昇編、民衆書林、1991年

『新國語大辭典』申琦澈・申瑢澈編、三省出版社、1984年

『最新改訂三星版國語大辭典』韓國語辭典編纂會編、三星文化社、1991年

以下、便宜上これらを出版社名を取って『民衆』、『三省』、『三星』のように略記することにする。なお、辞典の表記を資料とする調査方法の長所と短所については車(1996)に述べたので、ここでは繰り返さない。

鳴音後濃音化は、普通、漢字語に限って生じる過程であるとされている。しかし、任洪彬(1981)のように、これを固有語の複合語における濃音化と一緒に記述する立場もある。

- (4) 가을-’바람 {秋風}、고기-’배 {漁船}、길-’가 {道端}、눈-’길 {雪道}、달-’빛 {月光}、땅-’바닥 {地面}、마음-’속 {心の中}、물-’고기 {魚}、봄-’비 {春雨}、손-’등 {手の甲}、솔-’방울 {松かさ}

確かに、どちらの場合も濃音化を生じる音韻的過程は鳴音の後のすべての平音ということで同じであるし、その他の点でも共通する部分がないわけではない。しかしながら、両者の間には本質的な違いがあるように思われる。固有語の複合語の場合濃音化するかしないかは構成要素間のある種の統辞・意味関係に依存するのに対して¹⁾、漢字語の場合はそれとは異なる別な原理が働いていると考えられるからである。したがって、やはり通説通り両者を別に扱うのが妥当であると思われ、本稿もこの立場を取る。ただし、非漢字語要素と濃音化字音素との結合からなる混成語は、記述上妥当と考えられる場合には漢字語に準ずるものとして適宜例の中に含めることにする。

次の例のように、／ㄱ／末音を持つ要素に／ㄷ、ㄴ、ス／など歯音系の平音で始まる濃音化字音素が続く場合は、鳴音後濃音化とは独立した過程——側音後濃音化——によって処理されるものと見なし、以下の記述にはこの種の例は含めないことにする。

- (5) 性：植物’性、自律’性、物’性、活’性
的：藝術’的、現實’的、物’的、質’的

2. 濃音化字音素

今回の調査および分析に結果、次の3類28個の濃音化字音素が得られた。

- (6) I類・・構造の如何にかかわらず濃音化を生じる字音素(14個)
價、間、件、格、科、權、券、圈、法、數、字、點、症、證

II類・・独立の語と結合する場合にのみ濃音化する字音素（13個）

課、級、氣、宅、房、病、床、性、税、狀、帳、調、罪

III類・・独立の語と結合する場合には濃音化せず、それ以外の場合に濃音化を生じる字音素（1個）

的

I類、II類、III類の区別は、定義に示したとおり、どのような語構成を成すとき濃音化が生じるかによる。ここで「独立の語」というのは「統辞上単独で用いることができる要素」の意味であるけれども、実際には辞典の語構成表記を利用した。例えば、「生産價」は辞典では通常「生産-價」のようにハイフン(-)により語構成の切れ目を表記している。このような濃音化字音素とその前の要素の間に切れ目が表記されているものは、「独立要素+字音素」の構造であると見なした。厳密に言うところこれは少し乱暴なやり方である。独立の語としての性格が弱い語の後に切れ目が表示されていたり、あるいはその逆に独立の語としての用法がある要素の後に切れ目がなかったりする場合も散見される。また、辞典間で表記が異なる場合もかなりある。したがって、本稿では、基本的には『民衆』の表記に従ったが、疑義のある場合には他の辞典を参考して適宜訂正した。

語構成の他にも濃音化字音素を記述する場合に留意しなければならないことがいくつかある。まず第一に、濃音化字音素を記述する場合、単に形式面にだけ注目してはならない。同じ漢字表記が与えられていても、意味が異なれば、全く濃音化しなかったり、あるいは少なくとも濃音化の分布が異なる場合があるからである。したがって、濃音化字音素という概念は形式と意味と兼ね備えた実態であると見なすべきである。つまり、厳密に言えば、文字形式は同じでも意味が異なれば、別個の字音素と見なさなければならない。

第二に、鳴音後濃音化の分布は造語成分としての字音素の生産性とかなり密接な関係がある。つまり、字音素が他の要素の後に付いて造られる語例の数が多ければ多いほど、濃音化の規則性が高く例外が少なく、逆に、そのような語例の数が少なければ少ないほど例外が多いという一般的傾向があるように思われる。特に、造語能力が非常に大きく必要に応じて新しい語をいくらかでも造ることができるようないわゆる「開かれた類」を形成する字音素は、規則性が著しく高く例外はほとんどない。もちろん、「開かれた類」とその逆の「閉じられた類」の区分は厳密なものではなく多分に便宜的で段階的なものである。どの字音素でも常に新語を造る能力は潜在的に持っていると考えられる。しかしながら、ある種の字音素はそのような能力が全く失われてしまって一定の語類に限ってその成分となるように思われ、またある種の字音素は自由な造語能力を持ちいくらかでも新語を造る可能性があるように感じられることは否定できない。特に、学術用語・専門用語を造る字音素に「開かれた類」を形成するように感じられるものが多い。また、一般に、同じ字音素であっても、独立要素と結合する場合の方が、単純語の成分となる場合よりも生産性は高い。

第三に、語の新旧も鳴音後濃音化の分布に密接に関係している。つまり、昔の制度や古くからの風俗・習慣、伝統的な概念などを表す歴史のある言葉は例外になりやすく、新しい近代的

な概念を表す語は規則的な性格が強い。もちろん、古い語であれば必ず例外的な性格を持つというわけではないけれども、そのような傾向があることは否定できない。伝統的な語が音韻的に特異な性格を持ちやすいことは、鳴音後濃音化に限らず韓国語の他の音韻過程に関して²⁾、あるいは他の言語の音韻過程についてもしばしば観察されることである。

3. 各 論

以下、今回の調査で抽出された濃音化字音素を個別的に検討することにしよう。韓国語の字母(カナダ)順に取り上げる。濃音化字音素は【 】の中に入れて示し意味区分は《 》で示す。語例は調査で拾ったものを網羅的に挙げることを原則としたが、その数が多すぎる場合には一部だけを挙げるにとどめ最後に「など」、「など多数」と記した。

事例の数が少ないとかその他の理由により濃音化字音素の中に含めるには多少抵抗があるけれども、それに準ずるものとして記述すべき字音素がいくつかある。それを疑似濃音化字音素と呼ぶことにするが、本稿では扱わない。

3.1 I類の濃音化字音素

I類の濃音化字音素は構造の如何にかかわらず、つまり、独立要素と結合する複合語においても単純語においても濃音化を生じる字音素である。ここでは全部取り上げる余裕がないので、／ㄱ／で始まるもの8個だけを扱うことにする。

3.1.1 【價】／가／

字音素【價】は《価格》あるいは《価値》の意味で用いられる要素である。この二つの意味は微妙に異なるけれども、少なくとも濃音化の問題に関する限りは区別して別の字音素とする必要はない。

独立の語と結合する成分としては、辞典に記載された語例の数を見る限りそれほど生産性は高くない。しかし、近代的な概念を表す用語では例外なく濃音化を生じている。

(7) 公定-’價、生産-’價、營養-’價、原子-’價、適正-’價、指定-’價、最高-’價など

この構造の語例では例外らしく見えるのは次の3例だけであった。

(8) 別買-價 {元貢以外の貢物に対する価格}、元貢-價 {定期的貢物に対して官庁で支払った価格}、人情-價 {非公式に手数料として付ける米}

(8)の例においては『民衆』、『三省』、『三星』の三つの辞典間の不一致が見られる。語義からもわかるように(8)の例はいずれも古い制度を表す用語である。一般的規則適用の影響を受けないまま言わば音韻的に「化石化」したものと見なすことができる。

次のように西洋系の外来語と【價】が結合した例でも、やはり濃音化が生じる。

(9) 옥탄-’價 {オクタン価}、이온-’價 {イオン価}

【價】が単純語の成分となっている例は独立語との結合に比べてかなり多い。若干の例外を除いてやはり濃音化を生じており、したがって【價】は典型的なI類の濃音化字音素である。

(10)a. 連体修飾関係

高’價、單’價、等’價、實’價、原’價、定’價、眞’價、現’價など多数

b. 動詞目的語関係

減’價、決’價、越’價 {支払}、評’價、換’價 {値踏み} など

c. その他

代’價、買’價、名’價 {名望と声価}、物’價、米’價、時’價、株’價、地’價、平’價など多数

(10a,b,c)の区分は、構成要素間の関係に基づくものであるが、いずれの関係においても濃音化が生じている。固有語の複合語における濃音化にはこの種の関係が重要な役割を果たしている。(10a)や(10b)のような関係の場合、原則として固有語では濃音化しない。したがって、これらの例は、前述のように、鳴音後濃音化が漢字語を特徴付けるものであるという解釈を支持している。

【價】を含む単純語で濃音化が生じないもの、あるいは少なくとも一部の辞典で濃音化の表記がないものは次の通りである。

(11) 乾價 {酒に代わりに出すお金}、驅價 {官吏が召使いの給料としてもらう品物}、無價 {無料、非常に高価なこと}、船價 {船賃}、二價 {李朝の付加税の一種}、換-平價 {為替平価}、厚價 {高価}

三辞典とも濃音化しないとしているもののうち「乾價、驅價」はいずれも古い概念を表す語であり、辞典間で表記が異なるもののうち「船價、二價」とおそらく「厚價」も伝統的な語である。「二價」には「二’價 染色體、二’價 元素」など学術用語としての用法もあるが、その場合には必ず濃音化する。「無價」は後述の「無-價値」の影響で濃音化を生じないのではないかと推測される。「換-平價」に見られる辞典間の不一致は誤記である可能性が大きい。それに関連する(10c)の「平價」はどの辞典でも濃音化すると表記されているからである。

字音素【價】には他の字音素には見られない特異性がある。一般に、濃音化字音素であっても「独立の語+独立の語」の構造を持ついわゆる「ゆるい複合語 (loose compound)」³⁾の第二要素の先頭の位置では濃音化は生じないのが普通である。

(12) 国家 權力、軍事 法廷、外科 病院など

ところが【價】は、「價格」の場合に限ってであるが、辞典によって表記の不一致は見られるけれども、濃音化が生じると表記している例がかなり見られる。

(13)鑑定 價格、課税 價格、末端 價格、生産 價格、市場 價格、賃貸 價格、自由 價格、販売 價格、貨幣 價格など多数

しかし、同じ【價】で始まる語であっても「價值」の場合には濃音化を生じると表記したものはなかった。

(14)交換 價值、附加 價值、使用 價值、作品 價值、投資 價值、稀少 價值など

次の例は「ゆるい複合語」ではないが、やはりどの辞典も濃音化の表記を与えていない。

(14)に準ずる構造上の理由によるものと考えられる。

(15)没 - 價值 - 性、無 - 價值

3.1.2 【間】／亅／

【間】は様々な意味で用いられる要素である。大きく分けて《～する場所、～のある場所》、《期間、空間》、《間柄》、《～にかかわらず》の意味で造語成分となる。このうち濃音化字音素として認められるのは最初の《～する場所、～のある場所》の意味の場合だけである。この意味では次のように語構成に関係なく濃音化する。

(16)a. 複合語

拘留 - '間 {拘留場}、大門 - '間 {正門の内側の空間}、洗手 - '間 {洗面所}、熟設 - '間 {宴会の調理場}、車 - '間 {車内・車中} など

b. 単純語

庫'間 {倉庫}、門'間 {戸口}、退'間 {母屋に付けだした物置などの部屋}

例外は単純語構成の「廚間」{李朝の宮殿の調理場} だけであった。

この意味の【間】は固有語化しており、辞典では漢字で表記されるけれども、普通の韓国人にはこれが漢字要素であるという意識はほとんどない。実際、次のように固有語との結合する例も多く、この場合にもやはり濃音化する⁴⁾。

(17)고기 - '間 {肉屋}、대장 - '間 {鍛冶屋}、뒤 - '間 {便所}、여물 - '間 {まぐさ小屋}、절 - '間 {お寺} など

次の語の【間】は部屋の意味であり(16)、(17)に準ずると思われるが濃音化しない。

(18)内間 {婦人の居室}、單間 {一間}、別間 {別室}、數間 {すうま}、御間 {寺の本堂}

しかし、(16)、(17)の例が「名詞＋【間】」の結合であるのに対して、これは「形容詞的成分＋【間】」の連体修飾関係の結合である。濃音化を生じないのはそのためであると考えられる。

その他の意味の【間】は一切濃音化しない。この場合には例外や辞典間の不統一は全く観察

されなかった。

(19) 《期間・空間》

a. 複合語

多年-間、當分-間、暫時-間 {しばらくの間}、造次-間 {しばらくの間} など

b. 単純語

空間、期間、民間、瞬間、時間、月間、人間、中間など多数

(20) 《間柄》

犬猿之-間 {犬猿の仲}、内外-間 {夫婦の間}、母子-間、子女-間 {息子と娘の間} など

(21) 《～にかかわらず》

可否-間 {とにかく}、多少-間 {多少}、早晚-間 {早晚}、左右-間 {とにかく} など

3.1.3 【件】／仵／

字音素【件】は、次のように構造の如何にかかわらず濃音化を生じる I 類の濃音化字音素である。

(22)a. 複合語

無用-'件 {無用のもの}、上上-'件 {最高級品}、訴訟-'件 {訴訟事件}、依例-'件 {いつものこと} など

b. 単純語

難'件 {難事}、文'件 {公的文書}、本'件、事'件、案'件、例'件、要'件など多数

例外は非常に少ない。複合語では『三省』だけが「御覧-件」{王が見る書類} に対して濃音化しないとしているが、表記もれの可能性が大きい。単純語では次のような例外が見られた。

(23) 物件 {品物}、物件-費 {品物の購入費用}、破件 {壊れて使えなくなった物}、敝件 {古くなった物}、好件 {いい品物}、好-條件

「物件」は日常的によく用いられる語であり、ほとんど固有語化して漢字語であるという意識は全くない。鳴音後濃音化を生じないのはそのためではないかと考えられる。調査対象とした三辞典以外の辞典でも一切濃音化の表記はない。ところが「物件-費」には濃音化の表記が見られる。これは、複合語になることで漢字語としての意識が生じるためではないか、あるいは「人'件-費」との類推があるのではないかとと思われる。実際、「物件」にも {もの、品物} の意味の他に法律用語として {法的権利の対象になり得るもの} の意味での用法があり、その場合には濃音化を生じる。「好件」は調査した三辞典の中で『民衆』だけが濃音化しており、他の二辞典は濃音化しないとしているけれども、他にも濃音化を表記している辞典がある⁵⁾。「敝件」と「好-條件」は表記もれの可能性が大きい。

【件】はほとんど生産性がなく、それを含む語類は小さな「閉じられた類」である。また、近代的な語ばかりでもない。にもかかわらず例外が少ないのは、【件】は語頭に現れることが非常にまれな要素であるから平音・濃音の交替を生じることほとんどないためではないかと考えられる。つまり、【件】は／件／ではなく／𠄎／であると意識されやすいのではないかと思われる。【件】で始まる数少ない例のうち「件数」も実際には「𠄎卒」とも発音されているのをよく耳にする。

3.1.4 【格】／격／

字音素【格】は《文法的格》および《品格・格式》の意味を持つ造語成分である。まず文法用語の方から見ると、生産性はあまり高くないが次のように語構成に関係なく濃音化を生じるのが普通であり、したがってこの用法では明らかにI類の濃音化字音素である。

(24)a. 複合語

共同-'格、副詞-'格、叙述-'格など

b. 単純語

斜'格、主'格、奪'格、呼'格など

例外は次の4語である。

(25) 變成-格、比較-格、所有-格、造格

いずれも近代的な概念を表す用語であり、音韻的にも(24)と(25)を区別する根拠は何も見当たらないから、濃音化しないのが正規の発音であるとすれば、純粹に辞書的な例外として処理されるべきものである。

《品格・格式》の意味では、複合語らしいものは「座上-'格」{ある席での頭に当たる格式}一語しか見当たらなかったが、どの辞典も濃音化している。単純語構造では濃音化するものとししないものが大体半々くらいである。

(26) 濃音化するもの

a. 連体修飾関係

公'格 {官職の格式}、同'格、本'格、賤'格 {卑しい品格} など

b. 動詞目的語関係

昇'格、失'格、違'格 {格式・道理に違うこと} など

c. 並立関係

位'格 {地位と格式}

d. その他

性'格、人'格、品'格、風'格など

(27) 濃音化しないもの

a. 連体修飾関係

古格、舊格、原格、逸格

b. 動詞目的語関係

具格 { 格式を備えること }、成格 { 格式を成すこと }、破格

c. 並立関係

氣格 { 氣品と品格 }、才格 { 才能と品格 }、調格 { 詩の調子と格式 }、志格 { 高尚な志と立派な品格 }

d. その他

價格、規格、寺格 { 寺の格式 }、相格 { 人相 }、資格、體格など

このほか「別格、定格」については『民衆』だけが濃音化するとしているが、他の二辞典は濃音化しないと表記している。構成成分間の意味関係の点からも音韻的観点からも濃音化するもの(26)と濃音化しないもの(27)を区別することはできない。ただ、濃音化するものの方が日常的な語が若干多いような感じがする。これだけでは決め手にならないが、《品格・格式》の意味の【格】も一応 I 類の濃音化字音素と見なすことにする。

【格】は次のような語にも現れるが一切濃音化せず、このような場合は濃音化字音素の例ではない。

(28) 沙格 { 船頭と助手 }、來格 { 来ること、來臨 }、船格 { 船子を助ける水夫 }、筆格 { 筆を置く道具 } など

3.1.5 【科】／斗／

字音素【科】は多様な意味で用いられる造語成分である。その意味の違いにより濃音化の分布状況が異なる。《学問科目・教科》、《医療分野》、《生物学的分類》、《科挙》、《罪科》の意味に分けて検討することにしよう。

《学問科目・教科》の意味ではかなり生産性が高く、次のように構造の如何を問わず濃音化を生じており、I 類の濃音化字音素である⁶⁾。

(29)a. 複合語

家政 - ' 科、公民 - ' 科、機械 - ' 科、歴史 - ' 科、理工 - ' 科、人文 - ' 科、造船 - ' 科、必須 - ' 科など多数

b. 単純語

農' 科、文' 科、本' 科、商' 科、選' 科、理' 科、全' 科など多数

ただ、「教科」およびそれを含む次のような複合語において、辞典間で表記の不一致が見られる。

(30) 教科、教科 - 目、教科 - 書

『三省』が「教科」では濃音化が生じるとしながら、「教科書、教科目」で濃音化の表記がないのは、後の二語が「教科」という見出し語の副見出し語として記載されていることによる

誤記の可能性がある。この例に限らずこの種の誤記は結構多いように思われる。稿者自身は、これらの語は確かに「ゆれ」はあるけれどもいずれも濃音化するのが普通だと思っていたのであるが、最近の辞典、例えば『標準韓国語發音辭典』(1992年11月刊)や『東亞新國語辭典』(1993年1月刊)などではすべて濃音化しないとしている。「ゆれ」を定着させようとする傾向があるようである。

次に《医療分野》の意味では、複合語、単純語共に全く例外なく濃音化を生じている。したがって、この意味の【科】は完全なI類の濃音化字音素である。

(31)a. 複合語

婦人-'科、小児-'科、神経-'科、耳鼻咽喉-'科、精神-'科など

b. 単純語

内'科、産'科、眼'科、外'科、耳'科、齒'科

《生物学的分類》の意味の【科】の用例は、今回の調査の対象としたような大辞典クラスの辞典では膨大な数に上るが、全く例外なく濃音化する。したがって、これも完全なI類の濃音化字音素である。

(32) 硅藻-'科、麒麟-'科、類人猿-'科、木蓮-'科、白鷺-'科、椰子-'科、葡萄-'科、河馬-'科など多数

この意味の【科】には次のように非漢字語と結合する例も極めて多いが、やはり例外なく濃音化する(固有語との結合に関しては注(4)を参照)。

(33) 개-'科 {イヌ科}、고양이-'科 {ネコ科}、곰-'科 {クマ科}、소나무-'科 {マツ科}、칸나-'科 {カンナ科}、콩-'科 {マメ科} など多数

《学問科目・教科》の意では【科】は典型的なI類の濃音化字音素であったが、これとよく似た意味でも《科举》の意味で用いられる場合は規則性がかなり低くなる。この種の語はもちろん古い伝統的な語であり、また完全に「閉じられた類」をなす。伝統的な語に例外が多いという一般的傾向を最もよく示す典型的なケースである。調査結果によると、この意味の【科】が濃音化字音素であるかについては、辞典により判断が異なるようである。

まず、独立の語との結合を見ると、(34)のように濃音化しないのが普通であるが、(35)のように辞典間の不統一が見られるものもかなりある。

(34) 大比-科 {覆試合格者に対して王が直々に行った科举}、式年-科 {式年毎に行う科举}、宗親-科 {王の親戚に対してのみ行った科举} など

(35) 生員-科 {式年文科の初試の一つである明経科のこと}、生進-科 {生員科と進士科}、進士-科 {司馬試の一つ} など

単純語構造では濃音化しないものが圧倒的に多い。

(36)慶科 {慶事に際して臨時に行う科挙}、大科 {科挙の文科のこと}、文科 {文官を選ぶ科挙}、僧科 {僧侶に行った科挙}、律科 {刑律に詳しい者を選ぶ科挙} など

ここで面白いことは、「文科」は(29b)に挙げたように「理科」に対する用語としては濃音化を生じ、(36)におけるように科挙の区分を表す用語として「武科」に対する場合には濃音化しないというように、濃音化の有無だけで語彙が区別されている点である。濃音化の分布の説明原理の一つとしてその示差的機能を挙げることに對して稿者は否定的な立場であるけれども、この例に典型的に見られるように、場合によって濃音化が示差的機能を持つことがあるという事実自体は否定できない⁷⁾。

次のように辞典間で表記の異なるものもいくつかある。

(37)講科 {講經科の略}、登科 {科挙に合格すること}、武科 {武官を選ぶ科挙}、丙科 {科挙の成績等級の一つ}

三辞典ともすべてが濃音化すると表記している語は「正'科」{文科と武科の通称} 一語だけであった。なお、《科挙》の意味ではないが、伝統的な学問に関わる「四科」{儒教の四つの学問：徳行・言語・政事・文学}は『民衆』だけが濃音化しないとしている。

《科挙》の意味での【科】について以上を総合すると、『民衆』は「正'科」を除いて一切濃音化しないとしているから、これは濃音化字音素ではないという立場に立っていることになる。一方、『三省』と『三星』は複合語においては濃音化するのが原則であり、単純語では濃音化しないのが原則であるとしているから、Ⅱ類の濃音化字音素と見なしていることになる。

最後に、《罪科》の意味での【科】を検討することにしよう。例はあまり多くないが次のように濃音化するもの、しないもの、辞典間で表記の異なるもの様々である。

(38)a. 濃音化するもの

前'科、罪'科

b. 濃音化しないもの

罰科-金 {罰金}、併科 {同時に二つの刑を受けること}、嚴科 {嚴しい罰}、自科 {自分の犯した罪}、重科 {重い罪・罰}

c. 辞典間で表記の異なるもの

輕科 {軽い罪・罰}、犯科 {罪を犯すこと、法にふれること}

全体的に見ると濃音化しないのが優勢のようである。この意味では独立の語と結合しないので、構造面からの推測はできないが、濃音化字音素の中を含めず、濃音化例は完全に辞書的に規定される不規則形として記述するのがもっとも妥当なようである。

3.1.6 【權】／ 권／

【權】は非常に造語能力の大きいⅠ類の濃音化字音素である。特に独立要素と結合する例が多く、法律書を調べればその数は膨大なものになるだろう。今回の調査で収集したものだけで

も200例を越える。単に数が多いというだけでなく、法律上の必要に応じて次々と新語を造り出すことができ、「開かれた類」の語彙を形成する要素である。濃音化の分布は非常に規則的であり、独立の語との結合では極く少数の例を除いて濃音化する。

(39)拒否-’権、基本-’権、代表-’権、生存-’権、市民-’権、自衛-’権、主導-’権、統治-’権、投票-’権など多数

わずかに次の例について少なくとも一つの辞典において濃音化しないという表記が見られた。

(40)經-権 {経法と権道}、威-権 {威勢と権力}、相計-権 {破産手続きによらず債務を相殺する権利}、相對-権 {特定人を義務者とする権利}、上演-権、上映-権、通商-権、展覽-権、日照-権

いずれの辞典においても濃音化しないとされている「經權」と「威權」は『民衆』の表記に従って複合語として扱ったけれども、これらの語構成表記は辞典により異なり、『三省』と『三星』には単純語として表記されている。「經」には「佛經」{お経}の略としての独立用法があるけれども、「威」にはそのような用法がない。したがって、これは単純語と見なし下の(43)の中に含めるべきかもしれない。ただ、語義からわかるように、この二語は意味的に並立構造であるという点が特異であると言えないこともない。他の濃音化字音素にもこのような意味的並立構造の語で濃音化の例外となる語例がいくつか見られる。固有語の複合語の場合「가로-세로」{縦横}、「가을-봄」{秋と春}、「비-바람」{雨風}、「손-발」{手足}、「팔-다리」{腕と脚}などのように並立構成では濃音化は決して生じないから、同じ原理がここにも働いていると考えられるかもしれない。しかしながら、固有語の場合とは違って漢字語では(10c)の「名’價」{名望と声価}や(26c)の「位’格」{地位と格式}などのように並立構成で濃音化を生じる例もあり、確実な規則性を持っているわけではない。(40)の他の例については辞典間で表記の不一致が見られるけれども、いずれも生産的な造語法による近代的な概念を表す語であり、例外性を示唆する要因は全く考えられないから誤記の可能性が高い。稿者の判断では少なくとも「上映權、通商權、日照權」については濃音化すると思われる。「日照權」は側音後濃音化により「照」が濃音化するので同じ語の中で二度濃音化が生じるのを避ける力が働いているのではないかと考えたくなる。しかしながら、実際にはそのような解釈を支持する例は非常に少なく、次のように側音後濃音化は鳴音後濃音化の妨げにはならない。

(41)日’周’圈、實’定’法、脫’脂’法、熱’帶’病、屈’水’性、發’展’性、日’常’性、血’栓’性、殺’生’罪、窃’盜’罪など多数

一方、【權】を含む単純語は例の数は多いけれども、「閉じられた類」の性格が強く自由に造語する力はない。(42)のように濃音化するのが原則であり、したがって【權】はI類の濃音化字音素であるけれども、(43)のように例外もかなりある。

(42)a. 連体修飾関係

強'権、公'権、大'権、同'権、私'権、三'権、實'権、全'権、専'権、主'権

b. 動詞目的語関係

棄'権、分'権、失'権、有'権、貪'権 {権勢を貪ること}

c. その他

官'権、金'権、母'権、民'権、女'権、人'権、政'権、債'権、親'権など多数

(43) 訴権 {採決請求権}、順権 {権力に従うこと}、正権 {正当な権利}、重権 {重要な権力}、
天権 {北斗七星の四番目の星} など

例外にはやはり古い伝統的な語が多い。動詞目的語構成の語が多いのも特徴である。この他に「弄権」{権力をほしのままにすること}については『民衆』だけが濃音化を表記していないが、これは誤記の可能性が大きい。

3.1.7 【券】/ 권 /

字音素【券】は《券、チケット》あるいは《文書》の意味で用いられる造語成分である。独立要素との結合ではあまり生産性は高くないけれども、例外なく濃音化を生じる。

(44) 景品-'券、急行-'券、傍聴-'券、商品-'券、旅行-'券、定期-'券、招待-'券、割引-'券など多数

一方、単純語成分としては濃音化する場合よりも、濃音化しない場合および辞典間で表記の異なる場合の方がむしろ多いように思われる。

(45)a. 濃音化するもの

金'券、馬'券、旅'券、株'券、證'券、車'券、債'券など

b. 濃音化しないもの

故券 {土地の所有権証書}、文券 {不動産等の権利書}、偽券 {偽造した証券}、呈券 {科挙の答案を提出すること}、鐵券 {勲功を記した書籍} など

c. 辞典間で表記の異なるもの

家券 {家屋の売り渡し証書}、田券 {田の所有に関する文書}

これを見る限りⅠ類の濃音化字音素なのかⅡ類の濃音化字音素なのか判断しにくい。しかしながら、(45b,c)の例はほとんど《文書》の意味でありまた古い伝統的な語が多く、(44)の複合語の例はほとんどが《券、チケット》の意味である。したがって、【券】も意味別に分けて記述すれば、《券、チケット》の意味ではⅠ類の濃音化字音素であり、《文書》の意味では若干濃音化する例もあるが、濃音化字音素ではないと考えることができよう。

3.1.8 【圈】/ 권 /

【圈】は、辞典の記載語例を見る限り、あまり生産性の高くない造語成分であるけれども、

例外の少ない「きれいな」I類の濃音化字音素である。独立の語と結合する場合には例外なく濃音化する。

(46) 共産-'圏、大気-'圏、文化-'圏、生活-'圏、赤道-'圏、回教-'圏など

比較的新しい用例として「與-'圏、與黨-'圏」{与党グループ}、「野-'圏、野黨-'圏」{野党グループ}、「運動-'圏」{運動家集団}のように、【圏】が《集団・グループ》の意で用いられることがある。これらは調査した辞典には載せられていなかったが、実際にはやはり濃音化して発音されている⁸⁾。

単純語では(47a)のように濃音化するのが原則であり、例外はわずかに(47b)の二例だけであった。

(47)a. 濃音化するもの

氣'圏、大'圏、魔'圏、商'圏、小'圏、水'圏、時'圏、緯'圏、重'圏など

b. 濃音化しないもの

衡圏 {大提学後任候補に打つ点}、會圏 {適任者の名の上に点を打つこと}

やはりこの場合も例外は古い語である。

注)

- 1) 固有語の複合語における濃音化については稿を改めて論ずることとする。
- 2) 車(1996)において側音後濃音化にそのような傾向が見られることを指摘した。
- 3) Allen(1974)参照。
- 4) 固有語との結合では、その固有語が母音で終わる場合、正書法上いわゆる「嵌入のs」が挿入される。本文に挙げる混成語の例についても同様である。
- 5) 例えば『東亜新國語辭典』。
- 6) (29b)のうち「農科、文科、商科、理科」を単純語として表記するか、複合語と見なすかについて、どの辞典も一貫していないようであるし、また辞典間でも違いがある。稿者にはこれらを複合語と見なすべき強い根拠がないように思われるので、ここでは一括して単純語として扱うことにした。
- 7) 例えば、呉貞蘭(1988)は、「個別的な」原因であると断ってはいるが、同音異義語の解消が濃音化の原因であったことを示唆している。
- 8) 『金星版國語大辭典』(1992年)は、これらの語を見出し語として記載しており、いずれも濃音化すると表記している。

参考文献

- 金 榮起 1975『Korean Consonantal Phonology』ソウル：塔出版社
金 鎮宇 1970「Boundary Phenomena in Korean」『Papers in Linguistics』2. 1.
南 廣祐 1984『韓国語の発音研究』ソウル：一潮閣
呉 貞蘭 1987「國語複合語内部の硬音化現象」『言語』12. 1：35-53
1988『硬音の國語史的研究』ソウル：翰信文化社
李 秉根 1985『國語音韻体系の研究』ソウル：開文社
任 洪彬 1981「사이시옷問題の解決のため」『國語學』10：1-35

- Chung Kook 1980 『Neutralization in Korean: A Funtional View』 Seoul: Hanshin Pub. Co.
許 雄 1984 『国語音韻学』 ソウル：正音社
1984 『国語学』 ソウル：Seam文化社
Allen, Margaret R. 1974 Vowel. Mutation and Word Stress in Welsh. Linguistic Inquiry
4. 2

本稿の内容の一部は朝鮮学会第43回大会において口頭発表した。